

福建莆田画家趙珣の研究—17 世紀早期福建絵画に見る洋風表現の再確認—

孫愛琪(日本学術振興会外国人特別研究員/東京大学東洋文化研究所)

本発表は、福建莆田出身の画家趙珣(1590?~1646)に着目するものである。1646 年に来日した福州出身の禅僧・百拙如理(1579?~1649)の齎した書画作品の中には、仏教篤信者で親友でもある地元の画家趙珣の作品が含まれていた。のち趙珣の作品は、隠元とその法嗣たちによって請来し続けられていく。さらに江戸後期の頼山陽や田能村竹田らは趙珣を高く評価し、コレクターであり書家の市河米庵は趙珣の作品を積極的に収集し、谷文晁の一門は趙珣作品の模倣作を残している。明治期に至っても、瀧和亭、富岡鉄斎らの南画家によって模倣作が続けられた。趙珣は日中美術交流史上、注目すべき画家と言えるが、その生涯、交遊状況、画業及び画風変遷についての基礎的事項や、その影響関係について、確実な議論は未だ進展していない(近藤秀實 2011, 2012、黄嫻 2017)。

そこで本発表ではまず、中国側の文献資料により、趙珣の生涯と画業を検討し、その活動の軌跡と具体的な作画環境を以下の 3 点から考察する。①曹学佺、徐燭、孫昌裔、許友等、閩中文壇を主導する地方名士の詩文集から、趙珣は若い頃から閩中文壇で活躍し、曹学佺(1575~1646)のような有力者に代わって絵を描き、彼らの支援のもとで浙・粵地区にまで創作活動が及んでいたことを明らかにする。②イエズス宣教師ジュリオ・アレーニ(1582~1649)らは趙珣がいた閩中文壇に長らく活動したため、宣教師がもたらした西洋銅版画の技法が、趙珣の作品に採り入れられた可能性を検討する。③趙珣と百拙如理らとの交遊関係から、彼の作品が江戸初期以降、日本に請来され続けた経緯を考察する。

次に、日本に多く伝存する趙珣の作品を中心に取り上げ、黄檗絵画と文人画における趙珣の位置付けを検討したい。発表者が確認した 40 点ほどの趙珣作品の中で、「松石不老図」(萬福寺蔵)や「松石図」(笠岡市立竹喬美術館蔵)などの濃墨の作品は黄檗僧侶によって贈り物や絵画学習の手本としても利用されていたこと、「蘆雁図」「蔬果図卷」(同個人蔵)などの淡墨の作品は京都の頼山陽、田能村竹田、浦上春琴の間で一時流行していたこと、「蜀栈道図」(橋本コレクション)のような着色山水は関東の谷文晁周辺で受け入れられたことがわかる。

最後に、趙珣筆「苦行釈迦像」(大分市立美術館蔵)に焦点を当てる。本図は墨線だけを重ねることによって釈迦の顔の骨格が描き出されており、趙珣同郷の画家曾鯨(1564~1647)が創り出した「墨骨法」と呼ばれる肖像画技法と結びつけることが可能であるが、洋画技法を仏画に取り込んだ点では、「旧洋画羅漢軸」(台北故宮博物院蔵)などの類例を含めてさらに検討する必要がある。趙珣は福建の一地方画家であるが、彼の交遊、創作及び作品の流通を通じて、17 世紀初頭における宣教師の来華と黄檗僧の渡日によって実現された福建絵画の多様性が垣間見えるだろう。